調査報告

2009年度対馬現地調査報告

── 目保呂国有林・豆酘龍良山国有林 ──

本　田　佳　奈
HONDA Kana

はじめに

九学会による対馬総合調査についての持続と変容をテーマに，2009年9月8〜11日に現地調査をおこなった．九学会連合調査報告書『対馬の自然と文化』では林業部門における調査精度が他の項目に比べて薄い．そこで今回の調査では国有林をテーマとし，島の北にある目保呂国有林，南の豆酘龍良山国有林を調査地とした．調査項目は①国有林内の小学校，②山林労働の重要な助け手であった対州馬の減少と保存運動，③国有林内における聖地のありようについてである．

Ⅰ　目保呂国有林

Ⅰ―Ⅰ．国有林で育った子どもたち

大正15年頃から昭和30年代まで，対馬の国有林では多くの子供たちが鬱葱とした大山林のなかで育った．彼らは山子や焼き子である両親にともなわれ，住み慣れた故郷を離れて国有林にやってきた．「こんな真っ黒い山があるのかと驚いた．」ある国有林で育った初老の男性たちが当時の思い出を語ってくれたことがある．カシ，シイ，クスノキといった照葉樹林の巨木に覆われた国有林は日も差さず，巨大で暗黒の山だった．山の深さ，険しさが増すほどに大人たちの労働は激しくなる．国有林払下地の開拓部落では，不慣れな重労働のため短命だった入植者が多かったという．そのような環境のもと，子どもたちは育った．

目保呂国有林（旧官有林）は，大正7年末からの林道工事を皮切りとして，翌年の林道開通，越の坂の土場（切り出した材を一時的に集めておく場所）完成以降，本格的な研伐事業が開始された．目保呂はしだいに集落化し40戸を数えるようになったため，大正9年には仁田小学校の分教場として目保呂学校が設置された．しかし爆発的な山景気は，徐々に衰退の兆しを見せた．大正末期になると，目保呂官有林経営は縮小化し，官有林内にいた山林労働者はその姿を消した[(1)]．郷里に戻るもの，新たな仕事を求めて他の地へ転出したもの，あるいは仁田や佐護にとどまり定住化した一家もあった．しかし当時を知る世代は高齢化し，多くが他界している．ちなみに目保呂村とともに瀬田村の枝村であった中栗栖村には，大正6年に八十八箇所が建立された．寄進者には官山に関係したと考えられる各県移住者があった．もっとも多いのは大分県（36人），ついで山口県（5人），広島県（3人）となっている．このほかにも九州以外の関西，四国など，全国からの移住者が官山に関係したことが

わかる[2].

Ⅰ―Ⅱ．国有林にあった小学校

対馬には現在80余りの小学校があるが，人口減少による休校・閉校となった学校はそれ以上に多い．建物が取り壊され草地となった峰小学校のような学校もあるが，校舎・校庭を保存した上でゲートボール場を設備し，地域交流センターとして比較的整備した吉田小学校など，閉校・一時休校後の地域における学校のありようは様々である．しかしガランとした旧校庭の隅には立派な忠霊塔，戦没者慰霊碑，功績を残した教師の顕彰碑が鎮座し，かつてここが地域社会における精神依拠の場所であったことを明示している．

しかしそのような学校の形跡さえ消えてしまい，ごくわずかな関係者の記憶にしか残っていない学校がある．目保呂国有林のなかにあった仁田村立仁田小学校分校である．国有林で伐採・製材・木炭焼き等の山林労働者の子どもたちのためにつくられた学校だった．

「目保呂はまだまだこの先に山がある．昔はここ（馬事公苑）がどんづまりではなく，もっと奥にたくさんの人が住んでいた．小学校もあった」という話を対州馬の調査中に聞いた．馬事公苑の先は舗装路が絶え，ダート道となる．地元の人しか通わない山道である．人家跡を残さない山中のどこに学校があったのだろうか．目保呂国有林の山の口である瀬田地区の総島由一さんと小宮キヨミさんに案内をしていただいた．

目保呂馬事公苑を過ぎて谷筋の林道を登っていくと，やがて大矢谷（通称オオヤノサエ）との分かれ道があり，さらに登ると三河内（サンゴウチ）と芦見河内（アシミゴウチ）というふたつの谷の分かれ道に至る．芦見河内をさらに奥へ登るとシュウシノクチという二つの谷の入り口に行き当たる．大正6年に開校した小学校はこのオオヤノサエ，アシミゴウチ，シュウシノクチ周辺を，3回にわたって移転した．関係者はこれを第一の小学校，第二の小学校，第三の小学校，と略称している．

第一の小学校跡：大矢谷と芦見河内との間

上県町誌によれば大正6年に作られた第一の小学校は，大矢谷と芦見河内との間にあった．道脇の狭い平地に，「目保呂小学校跡／見聞大正7年頃迄仁田農業補習学校／平成七年十月十日御岳クラブ建立」と銘を記した高さ約1メートルの白い角柱が立っている（写真1）．これは総島さんら登山クラブが卒業生の藤島春雄さん（92才）に正確な場所を教えてもらい，たてたものである．まばらにヒノキ造林が立ち雑草に覆われているが，この平地にはかつて八間（16メートル）×五間（10メートル）の木造校舎が立ち，運動場があった（写真2）．学校跡の附近には閉鎖された営林署の小屋がある（写真3）．ここは目保呂造林合宿所と呼ばれ，作業員の宿泊施設だった[3]．小宮さんの生家もこの附近にあった．小さな川が流れており，子どものころはここでカニを採ってはおやつに食べたという．小宮さんに「生家跡で写真を撮らせてください」とお願いすると，左右をきょろきょろしながら歩き始めた．やがて道の途中でピタリと止まり振り向いた．そのままニコニコ笑って動かない．どうしたのかと思ったらそこが生家の跡だった．立派な林道が生家の上に作られていた（写真4）．

写真１　目保呂小学校碑と総島さん

写真２　第一の小学校の校舎・校庭跡

写真３　営林署の旧造林合宿所

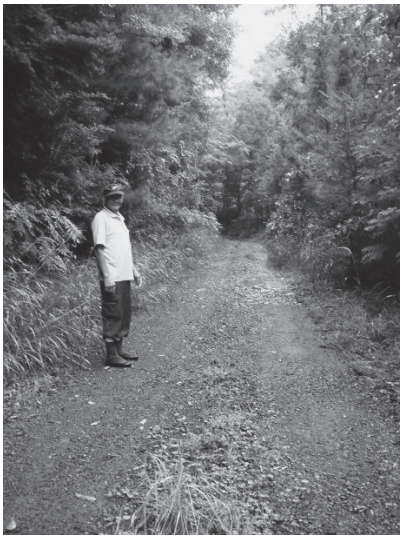

写真４　小宮さんの生家跡

芦見河内（あしみごうち）の谷

第一の小学校跡の先は，三河内と芦見河内との二股となる．三河内の先は御岳や佐護に至る山道が続き，周辺には二林班（国有林内を分割して班編成し，その順に従って番号をつけた）と呼ばれる山林があるという．芦見河内はおおよそ１キロほどの谷である．写真５は谷奥へと続く林道を撮影したものであるが，道下はやや崖となっており，川が林道にそって流れている．川脇にはわずかな平地がある．このような平地は川のゆるやかな蛇行に沿って点々と存在し，人々はそのわずかな土地を利用して人家，店を設けた．炭焼窯も築かれた（写真 6）．小宮さんの記憶では 40〜50 軒の人家が建ち並んでいた．その多くは粗末な小屋だったが，車引きを営んでいた石丸家や吉田家は立派な造りの家だった．菓子や饅頭を売る店もあった．

第二の小学校跡：シュウシノクチ

芦見河内の谷をさらに登って行くと，林道の左側の山すそに大きな台形の石積みが二つあらわれた．ここにはかつて六軒橋と呼ばれた橋が架かっていた（写真 7）．橋の長さが六間あるからではないかとのことだった．二つの石積みの間には，土留めの石積みが築かれている．おそらく降雨による土石流をふせぐものであろう．この六間橋のたもとに第二の小学校があった．六間橋より先は通称シ

写真５　芦見河内の谷

写真６　炭窯跡

ュウシノクチと呼ばれる二股となる．おそらくこのあたりが目保呂国有林の深部であり，斫伐しうる最後の奥山地帯だったのではないだろうか．事業の進行により林業従事者集団はさらに奥山へと進出し，小学校もその動きに従って移転したのであろう．

シュウシノクチのあたりはヤボや草木に覆われてはいるものの比較的開けた印象を与える（写真8）．行き止まりの印象も強い．ここから先はさらに細いダート道が続いている（写真9）．ダート道脇の造林された平地にはかつて丸三製材所の板倉庫があった（写真10）．丸三製材所は当時の目保呂でもっとも大きな製材所であり，三人の親方による共同経営だった．瀬田地区の神社に奉納された石燈籠には個人名とともに丸三製材所の名が刻まれている[(4)]．この板倉庫では映画や旅芸人による芝居がおこなわれたり，山神様の前では奉納相撲が興行されたりと，たいへんな賑わいだったという．ダート道の入り口の右崖上には小さな穴が開いている．かつての山神さまである．現在は祭られている形跡は見られない（写真11）．

写真７　六軒橋

写真８

写真９　さらに奥山へ続くダート道

写真 10　丸三製材所　板倉庫跡

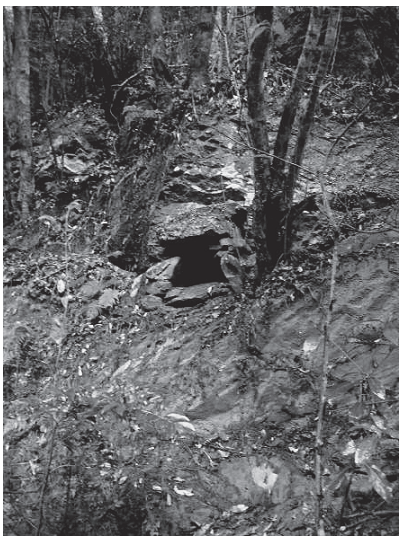

写真 11　崖上の山神さま

第三の小学校跡：大矢谷（オオヤノサエ）

目保呂の谷筋をいったん下った大矢谷（通称オオヤノサエ）にある．ここが目保呂学校最後の地となった．ここも第一の小学校と同様，跡地はスギ造林となっている．道向うには製材所の跡が残っている．この小学校がいつまで存続したかについては今回の調査ではよくわからなかった．

Ⅰ―Ⅲ．目保呂分教場の思い出

途方もなく黒い巨木の大山林のわずかな空を見上げていた幼い子どもたちは，その後どのように育ち，大人となっていったのだろうか．どのような人生を歩んでいったのだろうか．彼らの語りの特徴は，旧官有林の雄大さ，その日々を，子どもの心のままに記憶している点である．彼らの語りによってわたしたちは薄暗い官有林のなか，にぎやかな声に溢れた開拓村の風景を思い浮かべることができる．

目保呂国有林の山の口は上県町瀬田地区である．ここには目保呂学校の卒業生である藤島春雄・鹿夫妻が住んでいる（写真 12）．藤島さんの両親と祖父母は，もともと佐護で人夫を雇うほどの大きなナバ山（椎茸栽培）を仕立てていた．祖父はハツジじいさんといった．藤島さんは大正 11 年に佐護から目保呂官山へやってきた．6 才だった．昭和 3 年になり，分教場へ入学した．一教室の複式学級．入学当時，5 年生は 3 人，4 年生は 5 人，全体では 22 人ほどの生徒がいたように記憶している．

名前や性格は，今でもはっきりと覚えている．先輩には 6 年生のミツギウメキチくん．字が上手な人だった．奥の深い，堪忍袋を切らさない性格だった．成人して木炭検査技師となったが早世した．ウメキチくんの弟，カツタロウくんは藤島さんの 1 級下．兄同様に達筆で頭が良く元気のよい子だった．もう 1 人の弟，ユウイチくんは鹿さんと同級生だった．5 年生には平山ショウノスケくん（対馬人で故人）．4 年生に小西マサハルくん（故人），小宮マサタロウくん，田中マサイチ（？）くん，荻原くん（おそらく 4 年生），そして 5（4 ？）年生の松村ヨシビョウエくんがいた．

教室には悪そう坊主（悪坊主のこと）もいて，ずいぶんひどくやられて往生した．当時の男の子といえばケンカが当たり前．弟がやられれば，弟に非があっても仕返しをするのが仁義．どんな相手でも倒しにいった．けれど，弟に非があれば絶対に手を出さない人もいた．子ども心に立派な人だと思

写真12　総島さん（左）と藤島春雄さん（右）

った．小西マサハルくんは優等生．藤島さんの同級生だった妹のマスエさんも大変頭のよかった人．心のなかでライバルと思い，負けぬように一生懸命勉強した．松村ヨシビョウエくんは父親の手伝いで欠席が多かったが，頭のよい人だった．ユーモアとやさしさを兼ね備えた性格だった．成人後は福岡県篠栗町の議員をつとめたという．

第一の小学校時代には三浦シゲオ先生がいた．福岡県西津屋町の出身で当時はすでに70才くらいだった．足が悪く少しびっこをひいていた．藤島さんは昭和5年（3年生）までこの学校に毎日通い，上級生になると仁田の本校へ週に何度か通うようになった．第二の学校にはフルカワノボル先生．厳原町の出身だった．この先生も高齢だった．ここでは先生が5，6回代わったという．ここで藤島さんは卒業した．4才年下の鹿さんは第二の小学校に入学し，3年生を終えて転校した．フルカワ先生は高齢だったので，竹のムチで机をたたいて叱った（第三の学校の時代はすでに成人していたため記憶にない）．

藤島さんは勉強が嫌いではなかった．広島で中学を卒業した父は（旧三次郡三次町，現在の三次市出身），息子の進学を希望していた．藤島さんは小学校卒業後，一時仁田高等小学校へ通った．稲留先生という教師がおり，教員住宅に間借りをさせてもらった．しかし様々な事情により学業を諦め，官山斫伐事業の人夫として働き始めた．

目保呂で働く人々も様々であった．内地人が目保呂にたくさんやってきたのは小学校4，5年生のころ．越（くえ）の坂から醤油，味噌，米，麦などを運んできていた．ビンや袋を持って行き，掛売り．帳面を作って記録していた．藤本さんが働き始めた時代，目保呂には大分県出身者をはじめとする島外者よりも地元の労働者が多くなった．また貫尺法がメートル法へと移行した時代でもあった．そのため採寸には随分苦労したという．丸三製材所には3年間，19才の頃まで働いたが，この頃が目保呂のもっともおもしろい時代だったのではないかと思うとのこと．板倉庫での出芝居や，5月16日の山神さまの祭日の相撲では，多くの人が集まり賑やかだった．丸三製材所時代はマルノコだったが，和歌山出身の親方の藤本製材所ではオビノコへとより大型化した．藤本製材所は第三の学校そばにあった．まったろう爺さんの住んでいた平地の並びには，鹿さんの生家があった．そのほか，ヨキジイ，キヨミさん，きくジイさんの家も近くの道端に建っていた．18，19才になったころ，寄留人は自分ひとりになってしまった（母は福岡県鞍手郡宮川町出身のため，藤島さんの戸籍も同じく福岡県だった）．すでに藤本製材所もなくなっていた．しかし目保呂に家を建てていたため，そこから下県郡美津島町の白嶽阿連官山まで通った．一緒に行ったのは，ヨキジイさんやヨキチさん．みんな元気な人たち．トイチジイさんは炭焼をしていた働き者．自分は伐採に従事した．

子どもの頃の家はハナノキザエ．最後の奥山地帯のサエ（谷）にある．その先は丸三のトックリ官山を越えて舟志にいたる．オテミズというところだった．官山払い下げではシンブイチヤマ（新歩一山）を仲買いし，木炭を焼いた．トックリ山は大ドックリ（ドッカリ），小ドックリ（ドッカリ）というサエに谷筋が分かれた．その手前は東海岸の琴村への道．琴村の付近には鉱山があった．途中舟

志にそれる道があった．

二林班（ニリンパン）という山の呼び名は聞いたことがない．営林署関係者が使う呼び名．自分は知らない．ゲンタロウさんや原田ワタルさん，キヨミさんは営林署で働いていたので，そういった官山の名前を知っているだろう．ジュウロクマガリは芦見河内の先．谷底まで道が16回曲がる．ためしに数えたら本当に16回曲がった．

ちなみに，総島さんも農鍛冶だった父に連れられて，ジュウロクマガリを良く通った．芦見への坂はきびしかった．飼所の奥のヒヤミズというところには山神様が祭られていた．父は琴で物々交換をした．峠を越えると当時大好況だった巾着船が集結する港が見えた．船からは当時めずらしいラジオで春日八郎の「おとみさん」が大音響で流れていた．それが聞きたさにわざわざ父の後を追い，難所を越えていったという．

卒業後も藤島さんと同窓生との友情は続いた．ことに小西マサハルさんとは仲が良かった．小西さんは造船所の親方として長く働き，その後大阪に転出し，尼崎で荒物屋をはじめた．よい鉋や手道具があるとわざわざ藤島さんにおくってくれた．今でもそれらの道具は大切に使っている．藤島夫妻が大阪まで遊びに行ったこともあった．小西さんが亡くなるまで，春雄さんとの交流は絶えることがなかった．

Ⅱ　対州馬

Ⅱ―Ⅰ．瀬田地区の馬跳ばせ

対馬の山林における労働，あるいは陸上交通・流通において，馬は不可欠の存在であった．対馬の在来種は対州馬と呼ばれており，木曾馬や岬馬などとともに日本の在来種の一種として登録されている．温厚な性質のため手綱一本で女性が御すことができる．また蹄鉄を必要とせずに険しい山道に耐えうる強い足を持つ．粗食であっても強靱な体力を維持することができる．急峻な山地が島面積の80パーセント以上を占める対馬において，対州馬は極めて理想的な馬種であった．

目保呂国有林の山の口である瀬田地区には，「馬跳ばせ」と呼ばれる祭りがあった．元々は初午の日に地元のヤクマさまに参詣し，その後厄落としの名目で競馬がおこなわれた．瀬田地区のみなら

写真13　男と対州馬（撮影年月日・撮影者不明　豊田氏所有）　口ひげにくわえ煙草．小柄だが剽悍な風体の男性が馬上からカメラを見下ろしている．この写真を見たとき，わたしがこれまで出会ってきた対馬の男性たちを思い起こした．無骨で情緒的な物言いを好まない気質．どんな山も越えていく働き者たち．この男性と馬はどのような名を持ち，どのような経緯で対馬に住み，どこの山で働いたのだろう．写真14のような野良着姿の女性と対州馬の写真は対馬典型の民俗写真として数多く撮影されている．たおやかな女性の写真とは対照的な荒々しい祭りの熱気に満ちた男性と対州馬の写真はめずらしい．

ず，上県町の佐護，久原，鹿見，峰町の志多賀，三根，上対馬町の小鹿，一重，芦見，舟志といった，上県郡の東・西海岸の地区から騎手が参集した．最大20騎もの対州馬が勇壮に競う時代もあった．地元出身の騎手を応援するために各地から見物客が参加した．祭り当日の瀬田地区は出店が立ち，大変な人出で賑わった．

競馬の進行は以下のようなものだった．まずは2，3才の男児の相撲をおこなう．次に出馬しない馬たちが馬場入りした後，樫滝地区（NTT配電所前）のヤクマ神まで連れて行き小麦団子を食べさせた．帰ってきた馬に子どもを乗せ，成長を祈願した．そしていよいよ馬跳ばせとなる．華やかな飾りや鳴り物をつけた出走馬が馬場入りし，その見事さに大歓声があがった．出走場は2歳馬，3歳馬に分けられ，10歳馬であっても3歳馬として扱った．まずは一頭ごとにタイムをとり，近い馬同士を競わせた．馬の鼻面をもう一頭の尻に乗せ，スタートさせる．合図には旗を振り下ろした．その間隔を決勝ラインの審判2，3名が判定した．これを2回おこなって勝ち馬を決め，決勝まで進んでいった．当然のことながら出走者，見物人ともに気が高ぶっており，判定結果を不満として喧嘩になることも多々あった．騎手には親族や知人から花（祝儀）が付けられた．優勝者には優勝旗と反物が贈られた．（写真13）[5]．

写真14　対州馬と女性（撮影地厳原町豆酘地区・撮影日・撮影者不明 平井仁氏所蔵）　典型的な対馬民俗写真の類である．対州馬に乗った野良着姿の女性．豆酘地区の女性が仕立てた野良着は“はぎとうじん”と呼ばれた．豆酘の女性が美人で働き者が多いという評判はすでに江戸時代から始まっている．40代の人々はこのような姿の母親が朝早くに馬を連れて草きりや府中厳原への行商に出かける姿を記憶している．対馬の女性の過酷な働きぶりは，来島した大正期の研究者からもすでに発言されている．これまでにも多くの年配女性が，「ここまで働かないと食べていけないのか」と嘆いた，若き日の思い出話を語ってくれた．

戦後になると山林労働の減少によってこの馬跳ばせは次第に衰退した．対州馬の頭数も減少し，明治17年には4150頭あったが昭和40年になると1182頭に減った．祭りがやんだのは昭和47年である．平成になると対州馬の頭数はさらに減り29頭となった（平成21年9月1日現在）[6]．日本馬事協会は在来種の保存活動に努め，それに呼応して対州馬保存会（長崎県対馬農協）は浅茅湾島山ベイパークでの対州馬の飼育を開始した．個人的に飼育をする家もあったが，労働使役をしない対州馬は高級動物を飼育することと同じであり，その経費と飼育環境を維持することも難しい状況にあった．

そのようななか，上県町では目保呂ダム建設にともなう用地活用策を模索し，かつて瀬田地区のもっとも華やかな行事であった馬跳ばせを復活させ，かつ対州馬専用の馬事公苑を設立する案が浮上した．対馬が誇る在来種対州馬の古い伝統行事と馬事公苑という新しい形での対州馬と人とのふれあいによって，町の観光

事業へのてこ入れ，地域社会の活性化をめざしたのである．こうして目保呂ダムと馬事公苑は完成し，平成 14 年に 20 年ぶりの馬跳ばせが復活した．観客のなかにはかつて対州馬とともに働いた老人たちも多かった．馬跳ばせ前のイベントとして他センターで子ども向けの乗馬体験コーナーを開催したことがあった．わざわざその列に並び，乗せて欲しいと頼む老人がいた．彼は馬の姿を懐かしがり馬事公苑へも度々姿をあらわしたという．彼らにとって久しぶりに見る対州馬だった．自分たちの時代とは食べ物が違う，育て方が違うなどの感想を言い合っていたという．

対州馬の話その①小宮福生さんの話

写真 15　フジマルと小宮福生さん

瀬田地区から目保呂の馬事公苑へ登る道路の入口には，小さな馬場がある．対州馬が一頭飼われており，人の姿を見ると親しげに近寄ってくる．この馬場の持ち主である小宮福生さんに話をうかがった．「馬がかわいくて仕方のない人．馬に育ててもろうた，とよう言うてますねえ」というのが奥さんの評．そのことを福生さんに言うと，うーん，と黙った．しばらくして，「まあ，何というか．馬のおかげで健康だった」去勢しない馬はたいてい嚙む．目保呂で材出しに使っていたのはたいていオス馬だった．メス馬でも体格がよく強靱であれば使った．昔の対州馬は，まあ，雑種ですよ．道産子，木曾馬，あらゆる馬がいた．道産子は蹄鉄を打たないと体を支えきれない．サッペロ石で爪切りをした．今でもその道具を持っている．自分が 30 代までは．馬は船に乗せられてやってきた．博労が連れてきた．ここでは馬がいなければ生活ができなかった．馬はよくもって 15 年．あとはどうしても動きがにぶくなる．昭和 31 年に仁田中学を卒業した．同じクラスで高校進学者は 2，3 人．あとはぜんぶ地元に残った．馬はかわいい．今飼っている藤丸は自動車の音が分かるらしい．自分が「おーい　フジマルー」と呼ぶとひひーんといななく．仕事で疲れて帰ってきても，馬の世話をしないとどうも具合が悪い．平成 12 年ごろ再び飼い始めた．前の町長さんが 1 頭飼い始めたので，じゃあ飼おう，と思った．自分で小屋を立て，馬場を造った．昔飼った馬たちの写真はない．撮っていない．昔の人は馬をかわいがったが，写真を撮るわけではなかった．馬車曳きの時代のことはよく分からない．ここに自動三輪車が入ったのは昭和 27，8 年．それ以前は牛曳きが主流だった．犬ヶ浦のクエの坂（越坂）のドハに船が着く．そこまで牛で運んだ．馬を飼っていたのは昭和 47 年まで．法面工事を始めたのは平成 4 年から．大体，時代が変わるたんびに仕事もわたしの人生も変わった．

対州馬の話その②永嶋さんの話（目保呂馬事公苑インストラクター）

馬事公苑では現在 5 頭の対州馬が飼育されている．

1. 優平（ゆうへい）　　オス　平成 6 年 5 月 3 日生まれ
2. 松（まつ）　　オス　生年不明

3. 福桜（ふくざくら）　メス　平成 11 年 4 月 30 日生まれ
4. 保呂ん（ほろん）　　メス　平成 18 年 5 月 7 日生まれ
5. 広美（ひろみ）　　メス　平成 10 年 11 月 2 日生まれ
6. もんちゃん

馬事公苑には 200 ㎡の厩舎，800 ㎡の円形の乗馬体験施設，300m の散策路が設けられている．体験コースでは円形柵のなかでの乗馬のほか，川沿いの道を行く外周コースもあり，自然の中を馬と往くこともできる．公苑利用者は年間 3000〜4000 人ほどの来園者がある．島内で常時利用者は 7 人（中学生女子 4 人，大人 3 人），島外からのリピーターは 10 組ほど．静かで自然に囲まれた環境で，めずらしい対州馬が外乗できることを喜ぶ観光客も多い．また都市部に比べて乗馬料が安いことが喜ばれている．

永嶋さんは馬事公苑勤務六年目．以前は福岡県内の乗馬クラブのインストラクターだった．そのクラブが対州馬の訓練をしていたことが縁となり，馬事公苑専属のスタッフとなった．初めて対州馬を見たとき，まず思ったのは“荒い”ということ．もとの気性かはよく分からなかったが，とにかく荒かった．人家に預けられており，おいしいものを食べて運動不足だったためだろう．最初の印象は「かわいそう」．牛舎の中で牛に囲まれていた馬もいた．糞まみれだったのも不憫だった．福桜は最初乗せてもくれなかった．松（去勢済みのオス）は乗せてもバーっと走っていってしまう．そもそも馬は知らないもの，知らない環境に敏感に反応する．そのため馬事公苑まで連れて行くのも一苦労だった．まず，乗せてくれない．初めて馬たちを馬事公苑に入れた日は目保呂の谷の入り口から馬を曳いて歩いて登った．一頭連れていってはまた山を降りる．また連れて行く．その繰り返しだった．優平（オス）と広美（メス）は兄妹．美津島町鶏知で飼育されていたが前の馬主が飼えなくなったため，引き取られた．保呂んの名は目保呂からつけた．馬事公苑で初めて生まれた馬である．対州馬は出産の見きわめが難しい．体温変化に気をつけ毎日計測していた．まだ大丈夫だろうと思い，いつもどおり休日に入った．すると朝，代わりの人がえさやりと掃除にきたら，保呂んが厩舎のオリのすきまから出てトコトコ歩いていた．もんちゃんは六年前に長崎県鷹島のモンゴル村からやってきた．経緯はよく分からない．馬を飼育する理想的な環境は御崎馬のように少なくとも 50 頭くらいで放牧するのが良いと思う．外乗という手もあるが，長時間アスファルト上を歩かせることは良くないし，糞の問題もある．千俵播山で放牧するのもいいと思うとのことだった．

Ⅲ　豆酘龍良（つつたつら）山国有林

Ⅲ―Ⅰ．よみがえる名前――昭和 10 年の記念写真より――

明治における浅藻村の再開拓の歴史は，宮本常一『忘れられた日本人』の梶田富五郎翁によって語られた．ここに登場するのは昭和 11 年の浅藻村の集団写真である（写真 16）．梶田翁への聞き取りは昭和 25 年であったから，この写真の撮影当時，梶田翁はまだ存命だったことになる．ここにはおよそ 100 人の老若男女が写っている．彼らのなかには梶田翁同様にそれぞれの個人的経緯のなかでの浅藻開拓史を経験した人々もいたであろう．もしも彼ら 1 人 1 人から聞き書きができるのであれば，

写真 16 「昭和 11 年 2 月 26 日浅藻林野警防団発会式」記念写真
①花田チヨ（？・花田兄弟の母） ②花田勇太郎（花田兄弟の父） ③代用教員：安藤キクエ ④梶田キクヘイ（梶田富五郎の息子） ⑤市丸貞五郎 ⑥マユミトミ ⑦ナカオキチ ⑧タナカのおばさん ⑨松山オク ⑩ツジカワイワ（昨年 105 才で死去） ⑪松山タツエ ⑫イノさん ⑬小学校校長：ナガセミノル（？）

100 の開拓史，100 の浅藻の昔話が聞けるだろう．もはや彼らからそれを聞く術はないが，この写真に納まった彼らの姿は，大正，昭和へと移り行く浅藻村の発展のなかで生きた人々の証でもある．今回の浅藻調査では奥浅藻在住の花田正光・和雄兄弟にこの写真を見ていただいた（昭和 7，12 年生まれ）．すると 14 名の人物が判明した．また写真 17 についても 1 名の人物が判明した．

なお，名前の後に（？）がついているものは，姓名が不正確である可能性がある場合，もしくは人物と姓名が不一致の可能性がある人物である．すでに 70 年以上経過しており，花田兄弟が知る以前の若い面影である．確定はできないものだが推測の範囲として掲載した．小学校校長のナガセ先生（⑬），代用教員の安藤先生（③）といった教育関係者がいることも分かった．また浅藻村の繁栄に大きく貢献した市丸貞五郎氏の姿があることも判明した（⑤）．写真の中央部で白い大きな花飾りを胸につけ，制服を身につけた市丸氏は威厳ある面立ちで笑っている．梶田富五郎翁の息子，キクヘイ氏の姿もある（④）．写真左下にかたまっている女性 5 名（⑦ナカオキチさん〜⑪松山タツエさん）は奥浅藻の出身者である．おそらくこの記念写真は奥・中・小浅藻の三地区から構成される浅藻部落全体が参加しており，このように出身地区ごとに固まって座っているのではないかとのことだった．花田兄弟は奥浅藻の住民なので，他の地区の人物は良くわからないとのことだった．

写真 17　金剛院の前にて　①松山サンノスケ（草履作りをしていた人）

Ⅲ―Ⅱ．聖地，表八丁郭・裏八丁郭に残るもの

豆酘龍良山国有林内に残る表八丁郭・裏八丁郭にはそれぞれに石積壇が鎮座している．この地を聖地であることを示す古文書史料としては，南北朝期における「別してハてんたう（天道）の御罰を」という文言で締めくくる起請文，或は龍良山の山林開発は「天道の御罰」に触れると主張し，この地を神山不入地として囲い込みを試みた豆酘観音堂供僧等の一連の相論文書が現存する．文禄三年には「天道法師縁起」が成立した．強い霊性を持つ天道法師の物語のなかで，龍良山南麓の表八丁郭は誕生地，北麓の裏八丁郭は入滅地，表八丁郭を有する浅藻の西隣りの内院は法師の母の里という位置づけが定義化した．14 世紀後期に朝鮮で成立した『海東諸国紀』に，龍良山への走入りと推測しうる記載があることから，平泉澄はこの地を日本最古のアジール事例として紹介した．強い祟りを起こす神として畏怖され，立ち入った場合は「インノコ（犬の子），インノコ」と唱えて草鞋を頭に載せ，四つん這いで後退したというかつての慣わしは，そのようなアジール性を強く象徴するものとして注目されている．そのほかにも大陸や朝鮮半島に連なる太陽信仰・山岳信仰の事例として，豆酘地区に残る穀霊信仰の象徴，赤米神事の関連地として，両八丁郭は歴史学，民俗学の研究者から注目を浴びてきた．しかしこのような学術的定義はなされているものの，現実の，今日の表・裏八丁郭のありようについては，このような研究成果にはほとんど姿を現さない．そこで，両八丁郭に残る石造物や鳥居について調査した．

【表八丁郭】

①石碑

（表）「天道大神卒余多乃民救ふ大神　神の力わ有難や」

②石燈籠銘文

【左・右ともに同じ銘文】

（表）「奉献」

（裏）「昭和三十九年　九月吉日

建立人（セ）　山下ユキ

白田トモエ

外信者一同」

③木造の鳥居

【左柱】「瀬漁業生産組合　平成十九年　大安吉日」　【右柱】「祈願成就」

④木造の鳥居

【左柱】「瀬漁業生産組合」　【右柱】「祈願成就」

⑤鳥居

【左柱】「瀬定置網組合　平成 15 年」　【右柱】「祈願成就」

⑥石碑

「八丁角由来記

浅藻卒土の内の狭谷の内に在り，古代の磐境なり中に石の壇あり怕地（オソロシドコロ）と云ふ此の地の山の反対側にも同様の磐境あり．是を天道法師の墓，彼を同法師母の墓と古来俗説に伝へしが明治維新後此の磐境を天道法師信徒の祭るに任せ以て多久頭魂神社の神籬磐境と定められたり．大正年間文学博士平泉澄の研究に依り卒土は蘇塗なるを確めたり．即ち後漢書三漢伝に諸国の邑各一人の主を天神の天君と号するを祭る．又蘇塗を立て火水を建て以って鈴鼓を懸け鬼神に□ふ．其南界倭に近し又魏志に云う諸国各邑あり蘇塗と為す．諸山逃れてその中に入れば皆之を退きず蘇塗の義浮屠に似たる有りと蘇塗は卒土音を同じくす卒土の内卒土の濱は蘇塗の内蘇塗の濱なり．故に蘇塗は天君と号する天神を祭る処にして蘇塗の地諸山逃れて社内に入るときは追って是を捕へず」とあるに合致し卒土は霊地の名なりと豆酘は有名なる旧邑にして史蹟に富むこと本島屈指の地なり．神武天皇元年に龍良山にて天神を祀らしめ給ひしと伝ふ．天道法師は天武天皇白鳳癸酉豆酘内院に生れ幼より異才あり十一面観音の化身とも云われ□に天道の僧となり神通力を得たりしかば大宝三年癸卯朝廷に召され祈禱を行い，天皇の不豫を治し奉り賞として宝野上人の号を給り後本島に□り浅藻八丁角にて入足せりと俗に伝う

対馬島誌今梅山玄常天道法師縁起に依る

自叙伝　御嶽教対馬天道教会准教正　山下雪

顧みるに私の母は神の信仰心の篤い人であった私は年十二才にして母の信仰実践に心をひかれ自ら神を敬ふ心の芽生を感得した爾来私は只管神信心に□することになった昭和十五年三十才にして渡満し山下吉雄氏と結婚在満中に霊感により様々な予感が適中し戦時下の日本憲兵のおとがめを蒙る等の事も□であった．昭和二十一年久田村瀬に引揚げ木曾御嶽教に入り更に八丁角天道大神霊地に鎮座まします天道法師の古跡が放置された儘一般人の入山が「タブー」とされて居った．昭和三十六年一月吾に夢ありて「汝われの前に麥粒子を持ち来れ」と私は之□しく天道法師の神啓なりと自覚し神啓い従い□り天道法師聖霊を礼拝し茲に発心して八丁角天道法師霊地開□を神意と心得て霊力を注いだのである．昭和五十五年十一月多年に亘る神業が報いられ神殿の建設神前公園の□成概

ね整いたるに依り茲に天道大神霊地顕彰之碑を建立し吾れ無き後の世と雖も観音の化身として現れ給う天道法師の信仰に徹し拝ろがみ奉りて尊い御神□を拝戴される人々の多からんことを祈る

敬白

平山隆次郎謹書」

【裏八丁郭】

①石燈籠銘文

【左】

（表）「奉納」

（裏）「大正八年三月十八日」

（左）「市大組」

（右）「発起人　市丸馬太郎
　　大谷兼作
　　世話人　下村助十郎
　　中木喜作」

【右】

（表）「奉納」

（裏）「大正八年旧三月十八日」

（左）「市大組　山子中」

（右）「発起人　市丸馬太郎
　　大谷兼作
　　世話人　下村助十郎
　　中木喜作」

②狛犬銘文

【左】

（表）「献」

（裏）「佐須村阿連
　　昭和廿七年旧三月十八日
　　永留トシ子」

【右】

（表）「奉」

（裏）「厳原　岩永刻」

③石碑銘文

（表）「天道屋敷　昭和五十六（カ）年　三月十七日」

④木造の鳥居銘文

【左柱】（表）「浅藻飼付生産組合」

【右柱】（表）「平成 15 年六月吉日」

⑤木造の鳥居銘文

【左柱】（表）「海上安全」

【右柱】（表）「平成 11 年二月吉日」

このように，現在の表・裏八丁郭には以上のような石造物，鳥居が残されている．表八丁郭については御嶽教の流れを汲む天道信仰の気配が濃厚である．また花田兄弟の話によると，山下雪さんは昔隣村（内院か？）からバタコに乗って，夫婦でパルプ伐採の仕事に来ていたという．厳原のほうに住んでおり，月に一度表八丁郭に作られたお堂に信者と集まっていた．お年寄りたちは弁当を持ち寄ってこの堂に集まっていたという．奥浅藻在住の花田正光・和雄兄弟（昭和 7，12 年生）によると，中学を卒業した頃（昭和 30 年ごろ）までは今のような三角形の石積みではなく，もう少し崩れたような印象だった．頂点にある小さな社もなかった．また現在のような鳥居ではなく，もっと簡素で小さな鳥居があった記憶があるという．また，和雄さんは“おそろしい場所”という恐れもあまり感じたことはなかったという．小さいころは友達らと連れ立って八丁郭を越え，奥までシイの実拾いに行っ

た．ガネ（沢ガニ）を取りに闇夜に八丁郭あたりに行くこともあったが，さして恐ろしいところでもなかった．周囲から禁忌を説かれることもなかったようである．兄弟は卒業後離島し，平成 4 年ごろ浅藻へ戻った．そして「気がついたらああなってしまっていた」というのが，現在の表八丁郭の姿である．中浅藻在住の平井仁氏（昭和 21 年生）も中学卒業後離島したが，それまで八丁郭の恐ろしさについて一度も聞いた記憶がない．しかも，そもそも平井氏はその存在すら知らなかった．成人後に再び浅藻へ戻ったとき，初めて知り，行ったところその立派さ，荘厳さに感心する思いだったという．上記の⑥石碑にもあるように御嶽教の准教正である山下雪と（おそらく）その息子である平山隆次郎なる人物がこの八丁郭を整備した．まだ聞き取り者の人数も少ないため断定はできないが，研究文献にある「畏怖」と「アジール」としての性格は，地域住民共通の意識ではない可能性がでてきた．

また裏八丁郭については，大正 8 年 3 月 18 日（春の彼岸）に奉納された，浅藻の市丸・大谷氏の手による石燈籠を確認することができた．浅藻で繁栄した両家が市大組という林業組織で山子を抱え，林産業に従事していたことが判った．

おわりに

九学会調査から 60 年後の調査でのフォローアップは難題だが，島面積 80 パーセント以上を占める対馬の山林研究を考えるうえでは避けて通れない課題である．またこれまでおこなってきた九州各地の聞き取り調査のなかで，山林利用に関して頻繁に話題となったのが国有林での体験談や入山していた山子・焼子家族についての思い出だった．明治以降の山林大改革のなかで，山林労働者は全国各地の旧官有林・民有林を流転，あるいはその末に定住した．その最後の語り手は当時の子ども世代である．今回は目保呂国有林内の小学校に関する聞き取りをおこなった．学校は跡形もないが，その山で育ち学んだ生徒たちの大切な歴史があり，その後の人生を支える友情を育んだ場所だったことが分かる．非常に小さな歴史である．山は常に不安定な民を受け入れるものの，その経営限界に達すると非情に人々を押し出した．その繰り返しが日本の山林史の大部分を占めている．一時的に山に暮らした人々の痕跡をたどることは困難な場合が多く，わたしたちはあっという間にその手がかりをなくしてしまう．より詳細な聞き取りを進めていきたいと考えている．

調査項目 2 点目である対州馬についてであるが，対州馬もまた対馬の山林調査研究において，必須事項である．対馬の険しい山林は重労働を要求する．対州馬は仕事を助けてくれる大切なパートナーだった．従来の対州馬への民俗学アプローチは女性と対州馬の関係性について重点を置いていたが，今回の調査では男性と対州馬の関係性について焦点を当てた．近代的な山林改革の荒波のなかで，馬たちは実によく彼らを助け，働いた．馬跳ばせはその年一番の晴れの日だった．そのような誇らしい思い出は消えることなく，馬跳ばせの復活と目保呂馬事公苑開設へと結びついた．

また対州馬の歴史的特長についても考慮したい．対馬藩による馬の飼育事情についても勿論だが，とりわけ中世初期から室町末期の間に在地での利権・支配権を固めた各地域の在地小領主にとって，馬は彼らの権利を維持するための生産活動ならびに武力支配に不可欠な動物であっただろう．ある程度の戦闘を想定した騎乗訓練を施したのではないだろうか．全島支配者であった宗家は専用牧野 4 ヶ

所に２千頭もの馬を飼育したことが『海東諸国紀』に紹介されている．温厚に人を助けつつも，時に勇壮な対州馬は，このような島の自然環境の条件下と人間との関係性の上で生まれた．島の歴史と文化を内包する動物が，絶えることなく馬事公苑というあたらしい形で存続した．正式な騎乗訓練も藩政時代以来の復活ではなかったか．存続という点において，きわめてきわどいタイミングで成功した事例である．そしてそれを成しえたのは，やはり対馬人の馬に対する深い愛情と感謝の念であった．明治以降の軍部指導の品種改良や労働率向上を目指した交配によってどこまでが本当の対州馬と呼べるのか，ということも問題となっている．「今の馬は昔の対州馬ではない」という年配者の発言も聞いた．馬事公苑へ来る観光客の減少も事実である．しかし，上県町地域活性化センターの職員や地域住民，インストラクターである永嶋氏らの努力により，馬事公苑の馬たちが大切に飼育され，かつて馬と苦労を分かち合った老人たちが過去への経験を思い起こさせ，来島者には新たな経験と発見をもたらしていることもまた事実である．

調査テーマ３点目である国有林内の聖地のありようについてであるが，厳原町浅藻地区では国有林内の聖地，表八丁郭・裏八丁郭での現地実測と石塔類の銘文調査をおこなった．その結果，もっとも古い銘文が大正６年であり，昭和30年から50年にかけての銘文が多く，それ以前，たとえば近世の遺物などの現存は見られないことがわかった．また戦後から昭和50年ごろまでの御嶽教信者による八丁郭整備が行われており，新しい天道信仰の形態が発生したことは石造物および聞き取り調査からも明らかである．また７年前の現地調査で採集した昭和初期の集団写真に納まった人物の姓名が幾つか判明し，浅藻地区形成を担った人々の個人史を探る手がかりを得ることができた．

以上，『対馬の自然と文化』の補遺調査として，二つの国有林に関する現地調査をおこなった．はじめにのべたようにまだ目的の緒についたばかりの内容であり，まだまだ聞き取り調査もスタートしたばかりである．今後の調査の基礎としてここに報告する．

注

（１） 上県町誌編さん委員会編集『上県町誌』平成16年　1229頁．

（２）（出身地別による札所寄進者数）

大分県　36人　山口県５人　広島県３人　福岡県３人　香川県　２人　愛媛県１人　兵庫県１人　五島１人　壱岐１人　熊本県１人　中栗栖村９人　瀬田村８人　樫滝村４人　飼所３人　越の坂村２人　犬ヶ浦村２人　一重村１人　不明者５人　合計88人（『上県町誌』1230頁）．

（３） 位置は御嶽林道三河内支線の基点附近．元々は民有地だったのを営林署が借り上げた（942頁『上県町誌』）．また対馬営林署仁田担当区については大正３年に熊本大林区署対馬小林区署仁田担当区という正式名称により瀬田1024番地に設置された．その後63―１番地を昭和38年５月１日～昭和44年３月25日まで借上使用し，昭和38年10月29日に新築移転した．昭和44年３月26日には借上土地を購入している（同上941頁）．

なお，実業補習学校についても「本村ニ於テハ補習教育ニ欠クル所アリ．只青年会ニ於テ僅ニ夜学ヲナス位に過ギザリシハ当事者ノ遺憾トスル所ナリシガ大正七年五月一日ヨリ仁田・伊奈・久原ニテ各々農業補習学校ヲ附設スルニ至レリ」とある．仁田農業補習学校は生徒数12人，教員２名，出席率67．83パーセントであったという（647頁）．

（４） 瀬田地区神社石柱銘 【右柱】（中央）「奉」（左）「昭和二年　惣島仙右エ門　田口弥惣　西山岩吉　阿比留善吉　同　政治　日髙万作　財部秀雄　植村亦市　野田法雲　福田文作」【左柱】（右）「六月吉日　石

田兼治　川淵幾五郎　今崎忠一　森重延吉　藤　森茂（カ）　首藤政兼　丸三製材所　松木乕五郎　川本源盛　日高□義」

（5）　馬跳ばせの詳細については，平成 11 年 10 月 25 日，瀬田集落センターにて行われた会議資料「瀬田地区馬とばせの打合せ」より引用した（上県町地域振興課豊田氏より）.

（6）　日本馬事協会「ホースメイト」48 号　平成 18 年　4・7 頁　平成 21 年の頭数は豊田稔房氏より教示いただいた.

調査協力機関・調査協力者（敬称順略）

上県地域活性化センター地域支援課　豊田氏

目保呂馬事公苑　永嶋健一朗氏（インストラクター）

【上県町瀬田地区】

藤島春雄・鹿夫妻（大正 5・9 年生）　小宮キヨミ氏（72 才）　小宮福生氏（昭和 16 年生）

総島由一氏（昭和 20 年生）

【厳原町浅藻地区】

花田正光氏（昭和 7 年生）　花田和雄氏（昭和 12 年生）